

# 現代詩



だれかがうんだひかり

今村 瞳子

ハンドメイド私

兔 杜

夜の海、

遠くのコンビニが生み出す砂浜の陰影がすきだ  
何よりも誰よりもやさしい沈黙を保つてくれる  
だれかの足跡で出来た稜線は

ウロコみたいにかさなつて

わたしはそれを踏みにじる

イカの骨と発泡スチロール、

見分けたつてつかない

だれかが棄てた炭は

地中深くに埋もれた

地平線で蠢く漁船も

雲に吊り下げられた月も

この砂を照らすことはない

きつとこころから見つからない

そんな救いを舌の上でころがした

ひそやかなわたしだけの夜

冷蔵庫から寂しい夜を取り出して、雑に焼いて焦がした朝。

吐瀉する勇氣も無い僕の孤独はいつまでも冷やされたまま。

女の子の賞味期限は刻一刻と近づくのに、僕には「可愛い」

の調理師免許がありません。

不細工な器にピンク色の砂糖をまぶして、少しでも見栄

えが良くなるようにと丁寧に見繕う。

快樂と憂鬱だけが隠し味。

作り置きも出来ない僕の今日だけが私の本質。

毎日毎日、憂鬱を入れすぎてしまうのです。

卵かけご飯にかけ過ぎたお醤油みたいに。

憂鬱だけが「生」であり「性」だと、分かっているのに

入れすぎてしまうのだ。

過度な快樂は体を蝕む毒だと瞳の中の天使は嘲笑う。

僕の毎日を君はどんな顔して食べるだろう？

毎日君の人生を食べたいと願うの。「いただきます。」

君の今日を食べてしまえば、僕の明日は美味しくなるのかな。

君と僕の「生」のシェアをしようよ。

## 小さな存在

大平雅芳

冬の広がりのなかの一羽の鷗  
灰色の無限の空  
鷗はどこへ翔けてゆくのか

黙々と若布を干す  
働く人の背後には繰り返す波の音

自然の無限の広がりと圧倒的なちからのまえに  
小さな存在が向かい合う  
小さな人間、小さな生きもの

希望はなくとも春はやつてくる  
百花繚乱の春 色めく春の柔らかな風  
萌える若草 自然の全てが目に見え  
大した希望はもたなくとも人は生きてゆかねばならない  
自然の巨きな流れのなかの一つの過渡  
それでも人は懸命に生きて世を去るのだ

## 心ココロのリズム

おぐり あつこ

何日も続く雨に河川の水位上昇し  
濁流の中を必死に泳ぐメダカ  
大きな水溜まりに取り残される

父と幼い日の僕 ここで  
メダカをすくったんだよ

かんかん照りの太陽で水温上昇し  
濁った水を跳ね返すメダカ  
小さな水溜まりに取り残される

あの時と同じく ここで  
メダカをすくいだす  
押し流される日々の中で少年は大人になり  
清らかな心のリズム刻みながら  
週末メダカの水換えをする

かなしみ

坂倉玲子

満ち潮のように  
ザザッと 押し寄せてきて

もう

みんな 忘れてしまいたい

長い年月が経って

おだやかに 暮らしているのに

ザブザブと

遠い別れの記憶が

私をゆすぶる

スージー

佐藤裕一

スージーがいない  
スージーがいない

二時間前までは

大きく胸で呼吸いきをしていたのに

一時間前までは

顔に触れば 温かかったのに

スージーがいない

スージーがいない

スージーは遠くへ行ってしまった

スージーの魂は もうここにはいない

(スージーは、一緒に生活をしていた、雌のビーグル犬です。  
二〇二〇年十月に十六歳七ヶ月で生を終えました)

## 自然が一番

チズコ・W・ホエール

虫が 好んで食べるから  
穴ぼこ だらけの  
キヤベツでも  
太陽の光を いっぱい  
あびて

葉緑素も

目いっぱい 出来て

形は 小さくても

しつかり 巻いて

人間にとって

自然が

一番の

味 だネー。

なんてったって

キャベジンの素だもの・・・。

## 猫知らんぷり

村上 きょうこ

猫が多いという江の島

江島神社の参道

岩本樓の前に猫がいた

若いカップルが猫に語りかけていた

猫は往來の人を気にしていない

のんびりと日なたぼっこ

神社の境内にも猫はいた

コッキング苑前の広場にもいた

江の島ヨットハーバーのとなり

聖天島公園に猫がたくさんいるという

行つてみると六匹七匹

猫に近寄つても逃げたりしない

「みーちゃん」と呼んでみた

どの猫も知らんぷり

知らんぷりでもかわいい

ハーモニ

山田にしこ

母の日に

贈り物をする事がなかったし

受け取ることもなかった

母を後ろ目に

ナイチンゲールに親しむ

娘時代の ふとどきでしよう

知らぬふりして 何年も過ごしてきた

とある日

嫁御からアレンジメントの花籠ギフト

橙のダリアにピンクのカーネーション

ポインツことの赤いスプレー薔薇が

甘い香りを醸す

緑色の葉末と相まって

調和を生み出す

楽士たちにも ぜひ

届けたい音色のようだ

